小山工業高等専門学校研究紀要
第 37 号 (2005) 55 － 64

ペルージャ外国人大学における外国人に対するイタリア語およびイタリア文化の教育について (On the education at the University of Perugia for the foreign students)

小山工業高等専門学校名誉教授
山口淳三

1．はじめに

２００４年７月１日から同３０日までの一ヶ月間イタリアのペルージャ外国人大学に奨学生として留学する機会を得たので、この際、ペルージャ外国人大学における外国人に対するイタリア語及びイタリア文化の教育について考えてみることにする。

①イタリアの世界史上の地位

ヨーロッパ文化は、ギリシャ（芸術、文学、哲学等）、ローマ（法学、技術、芸術、文学等）及びキリスト教の三文化・文明の融和であるといわれており、かつてのローマ文化の発祥国であるイタリアは、ヨーロッパにおいて重要な位置を占めている。

それにもかかわらず、わが国では明治の開国以来今日まで、実学を重んじ外国文化の摂取相手国としては、高等教育の場においてさえイギリス、フランス、ドイツが中心であり、その言語である英語、フランス語、ドイツ語の教育が中心となっていて、イタリア語の講座を第２あるいは第３外国語として設置しているところはほとんどみられない。

この点に関しては、国際社会においてイタリア語と日本語は類似の言語環境にあるように見受けられる。

その理由は、イタリアと日本の歴史的発展段階が同程度に遅れて進行したことに由来するものと考えられる。

すなわち、日本国の統一・明治維新と天皇の東京遷都が1868年であるのに対して、イタリアではサルディニャ王国によるイタリアの統一が1861年、ローマ遷都が1871年であり、共に、イギリスやフランスに大きく遅れをとっていた。

さらに現代史を概観してみても、第２次世界大戦ではイタリアは、ギリシャ、アルバニア、北アフリカへの侵略国であり、大戦末期には特に北イタリアではナチス・ドイツに激しく対抗したとはいえむしろ敗戦国であり戦勝国とは言えない（わが国は完全な敗戦国ではあるが）立場にあった。また、特にイタリア南部では連合国（アメリカ合衆国）軍を解放軍と規定していた（わが国でも、錯覚かどうかは別として、一部にそのような解釈がなされたことがある。）点でもわが国と類似している。

このように、１９世紀において近代国家への出発が遅れた国であり、２０世紀において大戦の戦勝国とはいえない国イタリアにおいて、政府は、現在イタリア語に対してどの様な価値付けをし、イタリア語およびイタリア文化を外国人に対して教授し、イタリア文化を世界に普及・伝播しようとしているのかについて、ペルージャの外国人大学の教育を通じて調査研究を行い、我が国の外国人に対する日本語教育のあり方に資するものとしたい。

②学校の歴史

ペルージャはイタリアの中部にあるウンブリア州ペルージャ県の人口１５万人（栃木県小山市と同じ）の県都で、歴史は古く、先史時代、エトルリア時代、古代及び中世ローマ時代から現代に至るまで貴重な歴史的遺跡、遺品を多く留めている歴史・文化都市である。

なお、「ペルージャ外国人大学」を「ペルージャ大学」と呼ぶ者もいるが、「ペルージャ大学」は 1308 年に創設された大学であり、ボローニャ大学（1088 年？）やパリ大学 1200~1210 年？）より新しいとはいえ本稿で論じる「ペルージャ外国人大学」よりはるかに古い歴史を持っている。

「ペルージャ外国人大学」（以下、大学と言う。）の前身は、イタリア語及びイタリア文化の普及に熱心であったペルージャの弁護士アストッレ・ルパテッリが 1921 年に外国人に対して開設した「高等文化講座」であり、これが 1925 年に王立の外国人大学として発展、設立されたものである。

歴史的に見れば、ファシストのローマ行進及びムッソリーニ内閣誕生の年が１９２２年であり各国の同時期と比較すると極めて早い時期に、外国人を対象としイタリア語学およびイタリア文化の普及を目的とした大学が他国にさきがけて設立されたことは、イタリア全体がヨーロッパ文化の中心としての復興を目指して躍動していた時期とよく符号する。

[ムッソリーニ自身が歴史上マイナスに評価されることを受けて、彼の時代の事業を全てマイナス評価しようとする傾向があるが、彼の時代のイタリアにおいてもプラス評価されるべき歴史的発展がない訳ではない。ステレオタイプな見方では正しい歴史的評価はできない。卑近な例を挙げれば、たとえばムッソリーニと同時代のヒットラーは、1936 年のベルリンオリンピックに際して、ナチスドイツの国威を世界に顕示するために「聖火リレー」を発案・創作した。それが以後受け継がれ、何の疑問もなく、オリンピックやパラリンピックにおいて、ヒットラーとの結びつきは忘れ去られて、神聖な儀式であると考えられている。]

③学校の構成

ペルージャ外国人大学（以下大学と呼ぶ）では、毎年全世界約 130 ヶ国からの多種多様な文化を持つ老若男女がイタリア語およびイタリア文化を学んでおり、その数は 5,000 人を超える外国人留学生と 2,000 人のイタリアの学生からなり、約 100 名の教授陣が彼らの指導にあたっている。

大学の建物はガッレンガ校舎、プロシュッティ校舎、オルヴィエート校舎、ルパッテリ校舎、ヴァリトゥッティ校舎、リチェオ校舎等で旧貴族の建物、旧病院等が利用されている。旧建造物を利用することによって、わが国の新設大学とは異なり、多額の建築施設費を必要としないという利点があり、経費はかなり授業の充実に当てられると考えられる。

２．大学のコース・課程の概要

大学のコースは、「イタリア語イタリア文化コース」と「学位取得コース」があり以下のとおり分類される。

①イタリア語イタリア文化コース

大きく分けて「普通コース」と「特別コース・研修リフレッシュコース」二つに別れイタリア語及びイタリア文化を学んでいる。

ｉ.普通コース

特別コースはさらに細分され概略以下の表のような構成になっている。

普通コースは５つのグレードに段階付けられている。

第１～第４グレードの開講期間は各グレードともに３ヶ月間、年４回で下記のとおり。

１月７日ー３月末、４月初ー６月末、７月初ー９月末、１０月初ー１２月２３日。

第５グレードの開講は年４回、期間は下記のとおりである。

１月７日ー６月末、４月初ー９月末、７月初ー１２月２３日、１０月初ー３月末

ii.特別コース

特別コースは更に次のようなコースに細分されている。

普通の「特別コース」：１ヶ月コース、２ヶ月コース。開講は通年

「特別集中コース」：夏季に年３回（７、８、９月の各１ヶ月間）開講。一般学生が夏休みでキャンパスに残る学生数が少なくなる時期を最大限活用している様子がうかがえる。

その他「専門用語コース」、「イタリアオペラ・音楽コース」などが開講されている。

また、各国のイタリア語教師を対象とした「研修・リフレッシュコース」、イタリア人および外国人の専門家を対象とした「高級文化専門コース」なども開講されている。

②学部又は学位取得コース（CORSI DI LAUREA）および大学院コース(CORSI DI POST LAUREA)

学位取得コースは３年、大学院コースは２年の就学年数である。

このように、多様なコースが用意されているので世界各国からの多くの人々のニーズを充足することができる。

開講時期についても、就学希望者の便宜を図って年間を通して多数回設けていることは、クライアントである学生を確保するための非常に重要な工夫である。

３．特別集中コースの概要

以下の紙面では、今回受講した特別集中コース第３グレードの授業内容、授業方法等を中心に具体的な論述をする。

①受講学生のグレード決定

学生がどのグレードで授業を受けるかは、コース開講前に実施されるグレード決定テストの成績の結果によって決定される。

グレード決定は学生が最も適したレベルで授業を受けることを可能にするものであり、効果的な授業を行う為には非常に重要な事前の準備である。

レベル面でのミスマッチがあると、授業がスムースに進まなくなり、学生本人だけでなく、教官やクラスの他の学生にも多大な時間と労力の損失を生じさせる。

ｉ.グレード決定テストの内容

２００４年の「１月間特別集中コース」の開講期間は７月１～３０日、８月２～３１日、９月１～３０日の３回であった。

７月の授業を受けるためには６月３０日、７月１、２日のいずれかの日にテストを受ける必要がある。ただし、授業は７月１日から始まっているので、初日から受講するためには６月３０日のテストを受けなければならない。

テストはガッレンガ校舎の大教室で実施された。

（写真：ガッレンガ校舎の正面全景）

約 80 人ほどの受講生が第１回目のテストを８時半から１時間程度受けた。このような

テストは１日に何回か実施される。

第１回目のテストの内容：

８時半過ぎにA4用紙３枚の問題用紙が配布された。

１枚目は：用紙を縦２段に割り、左と右に短文が並べられていて、左右の関係の深い文を結んで一つの最も適当な文章にするもの

２枚目は：直説法、現在で書かれている日記文を適当な時制と法に直すもの（未来、近過去、半過去、遠過去、接続法、条件法等も含む。）

３枚目は：文章の空欄（２５箇所）に前置詞、関係詞等、適当な１語で埋めるもの

テスト終了後１時間ほどで採点され、学生が１～５のどのグレードの授業を受けるのが適当か格付けされる。

私の場合、テスト終了後１時間ほど後に、採点が何時おわるのかを聞くため試験会場の廊下に行くと２回目のテストの最中であった。教官が廊下に出てきたのでグレードの決定は何時になるのかと聞くと、大教室の中に入りなさいといって招き入れられた。すぐに教壇の横で「ペルージャ、大学をどう思うか。」「イタリアで何をしたいか。」「どこに住みたいか。」などの質問があり２～３分立ち話をし、3 Grado と大きな文字で朱書された用紙を渡された。

以上のような作業手順は短期間に大勢の受講生を公平にグレード分けする為には非常に効率的な方法であると考えられる。

ii.各グレードの教科内容

このテスト結果の用紙と日本で受け取っていた入学許可証を持参して大学の学生課窓口に赴き、クラスの配属と学生証明書を発行の手続きをしてもらうことになる。

なお、第１グレードと第２グレードは語学のみの授業であるが第３グレードからはイタリア文化、歴史、文学、習俗等の授業がある。

短期集中コースのグレード毎の１週間の授業内容は概略次のとおりである。

グレード１及び2　週２７時間

イタリア語　12 時間、イタリア語演習　6 時間、発音　3 時間、会話　6 時間

グレード3　週２７時間

イタリア語　12 時間、イタリア語演習　6 時間、発音　3 時間、イタリア文化　6 時間

グレード4　週 30 時間

イタリア語　12 時間、イタリア語演習　5 時間、発音　1 時間、イタリア現代文学　3 時間、イタリア現代史　3 時間、イタリア美術史　3 時間、

ビジネスレター　3 時間

グレード5　週 27 時間

イタリア語構文論・文体論　9 時間、イタリア語演習　5 時間、文体の語学演習　1 時間、発音　1 時間、その他　3 時間

①　校舎、教室など

ガッレンガ校舎で受講している第３グレード（中級）のクラスもあったが、私たちのクラスはそこから徒歩で１５分程離れたキャンパスの４つの校舎の教室で授業を受けた。

キャンパス内には大きな学生食堂もある。パン等の簡単な朝食やコーヒー、清涼飲料等を購入できるバールはプロシュッティ校舎とガッレンガ校舎内にある。また、学生食堂も昼食を用意しており、安価でボリュームのある食事ができる。

食事や飲み物が容易に摂れる施設が充実していることによって、学生が授業時間に精神集中して教授の講義を受講することができる環境が確保されている。

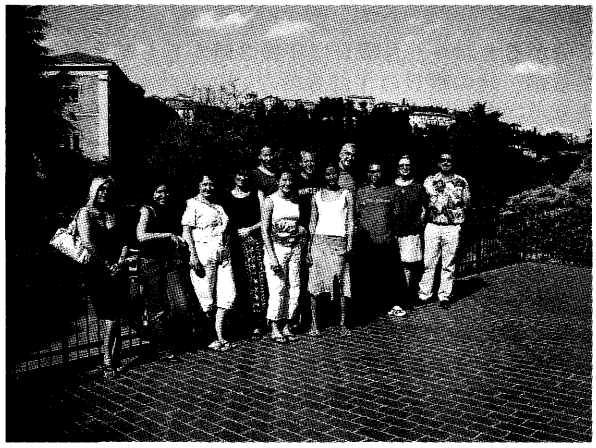
②　クラスの学生

十数名であった。授業期間中に出入りがあったので正確な数字は不明。

スペイン、ポルトガル及びブラジルの若い学生が学期途中で第４グレードに移籍した。単語だけでなく文法構造もイタリア語ときわめて類似性の高いスペイン語やポルトガル語を母国語とする学生は、授業に物足りなさを覚えて、担当教授の許可を得て上位のグレー

ドの授業を受けるためにクラスを変わることがある。第２グレードから移籍してきた学生もいた。

学生の出身国は、アメリカ合衆国、ブラジル、スペイン、ポルトガル、フランス、ベルギー、ドイツ、オランダ、レバノン、トルコ、オーストラリア、日本等。写真でおおよその年齢がわかると考えるが、２０歳位から７０歳位までの幅があり、職業等も学生、会社員、医師、ピアノ教師、学校の教官など多様であった。第３グレードは少なくとも３クラス以上あった。(演習担当の Professoressa Silvia SERNICOLA は第３グレードを３クラス担当してるとのこと)



(写真：クラスの学生)

③　１週間の授業時間割、担当教官、授業教室等
授業時間割等は下記のとおりであった。

2003 年ー2004 年　夏学期
第 3 グレードの特別集中コース　コード 8732　　(1-30　7 月 2004 年)

１週間の授業時間割

月曜日
時間　15-17　教室 12　プロシュッティ校舎　イタリア文化の基礎
火曜日
時間　11-13　教室 9　プロシュッティ校舎　イタリア文化の基礎
　　14-15　教室 A　プロシュッティ校舎　語学演習
　　15-19　教室 1　オルヴィエート校舎　イタリア語
水曜日
時間　9 - 11　教室 8　プロシュッティ校舎　イタリア文化の基礎
　　15-19　教室 5　リチェオ校舎　　イタリア語
木曜日
時間　8 - 11　教室 2　リチェオ校舎　　イタリア語演習
　　15-19　教室 8　プロシュッティ校舎　イタリア語
金曜日
時間　8 - 11　教室 4　リチェオ校舎　　イタリア語演習

11-13　教室４　リチェオ校舎　　発音演習
一週間の授業時間は　合計２７時間

担当教官は次のとおり
A.イタリア語
Gloria CORBUCCI　教授
B.イタリア文化の基礎
Cristina MADDOLI　教授
C.イタリア語演習、語学演習、発音演習
Silvia SERNICOLA　教授

授業時間割を見て分かるとおり、月曜日は午後３時から５時まで、金曜日は午前８時から午後１時までであるが、他の曜日は午前８時ないし９時から午後は７時まで授業がある。

イタリアでは昼休みが非常に長いのが特徴である。イタリアの生活全般について言えることであるが、学校生活においても、時間の配分に慣れるとハードなカリキュラムを余裕を持ってこなせることが分かる。

朝が早いことは、この大事な時間帯を少しでも無駄にしないので効率的に活用することができ、非常に合理的なカリキュラム構成の方法である。

一方昼休みが長いことによって、午前中の厳しい課業による疲労を回復することができ、また、ゆったりと昼食をとることによって、体の健康を保つことができるだけでなく精神面でも午後の長い課業に備え元気回復ができて十分な備えができる。

実際に、ワシントンからやってきた若いアメリカの大学院生が昼休みを短縮してもらって、夕方早く授業から開放されるように教授に申し入れたいという提案をクラス内でしたのに対して賛成する者はなく、サンフランシスコからの年配の女性は、自分は今のカリキュラムがよいと強く反対した。（なお、彼女はピアノの教師を職業としているので、音楽コースをも受講していた。）

他方、金曜日の午後と月曜日の午前に課業が組まれていないことは、イタリア国内での泊を伴う見学旅行等を組むのには非常に好都合であり、実際、学校主催のフィレンツェやローマへの一泊旅行もこの授業日程にうまく組み込まれていた。

テキストのコピーが、毎日各授業の始めに、教授によって配布される。
従って、教科書を購入する必要もないが、次回に何を学習するか教えられていないので、予習は出来ない。

予習ができないということは、授業時間の初めから終わりまで、一刻の途切れもなく精神を集中して授業をフォローしなければならない。従って、それだけ効果的な学習ができるという意味で、非常によい方法であると感じた。

４．特別集中コース・第３グレード（中級）の授業内容

A.　イタリア語(Lingua Italiana)

最初に文法 Conjuntivo の解説と演習の授業が徹底して実施された。その後、イタリアの習俗、イタリア人の現代生活の実態、考え方をそれぞれの学生の出身国のそれらと比較した討議が教官の司会の下に、教官と学生及び学生同士の討論が展開される。

１時間で教科書の１ユニットを終えるほどの早さであった。

教科書は"Qui Italia più livello medio","Espresso- 3" などで、日によって順不同にユニットが進められる。

この科目は、語学能力向上のためには最も重要なものであるが、内容が文法の解説とその演習が中心となるので学生の疲労度が最も大きな授業であった。従って、１時間ごとに休みを取り、いろいろなテーマを選んでクラスで会話をする時間が織り込まれた。教官は学生の疲労度をよく観察しているようであった。

良い教授及び良い学校という評価を学生からコンスタントになされ、クライアントである学生が各国から継続して来るために、各教授が常に授業に工夫を凝らして努力している様子が察知された。それは、決して学生への迎合ではなかった。

B. イタリア文化の基礎(Elementi di Civiltà)

41年前（１９５３年６月３０日にパリからペルージャ着）に戦後日本人で始めてペルージャ外国人大学に留学した須賀敦子（１９９８年没、上智大学教授、小説家）が「カティアが歩いた道」(「ヴェネツィアの宿」文春文庫)、「プロシュッテイ先生のパスコリ」(「ミラノ霧の風景」白水社）などのなかで記述しているように、当時から中級（Terzo Grado）以上になるとイタリア文化の授業が課されていた。
この授業内容と担当教授については、クラスの学生たち全員がもっともすばらしいと評価し、毎回大きな期待と教授に対する尊敬の念をもって出席している雰囲気が教室中に漂い伝わってくるものであった。
I　第１日目の授業
Cristiana MADDOLI教授は教室に入るといきなり、挨拶も自己紹介もなく、FAVOLA（教訓的な寓話）を大きな声で朗々と読み始めた。学生は聞き耳を立てる。
朗読し終わると学生に意味が理解できたかどうか尋ねる。
挨拶や自己紹介はその後行われる。
次に寓話のプリントが配布され、文章を目で追うことができる。
再度教授が読み上げる。
学生各自が、理解できない単語やフレーズの意味を自由に質問する。
教授は学生が理解するまで何度でもいろんな言い回しで説明する。
一通り理解できたところで，学生全員が文章の中の数行を順番に読み進める。
問題の文章が何を言おうとしているのかが質問され学生達がめいめい答える。
学生の自己紹介は教授が各学生に質問する際に付随的に行われる。
この教訓をどのように評価するかを討議する。
次に「文化とは何か」との問いが発せられ、学生が各々思い付いたことを答える。
文化についてのイメージが出来上がったところで、この授業でイタリア語、文学、芸術、映画、生活習慣等広く文化の課題を取り上げていくことを述べる。
授業は決して一方的な知識の付与に終わらない。
常に学生に質問し、学生に一生懸命考える時間を十分に与える。次にほとんどの場合、学生の母国とイタリアとを比較した事項の質問がなされる。
覚えることよりも考えることが重要であることを理解する授業である。
「教養がある（Colto/Colta)」ことの重要性を認識する。
教養とは感受性を高め、知識を深め、外界を理解し、相手を理解し、寛容であるとともになにものをも恐れず勇気をもって正しい行いをすることであるということを授業全体を通じていろいろな教材を利用しながら説明していたと受け取れた。
意見：日本の文化を諸外国に紹介する場合、どうしても戦争中の日本人の行為（創氏改名、日本語教育、日本式学校教育の義務化等）に対する後ろめたさから、自信を持ってわが国の文化の良い面を諸外国に積極的に紹介できなかったことがあるのではないか。
例えば、現在オリンピックの競技種目になっている柔道や国際的に盛んになってきている剣道等さえも軍国主義と結びつけて考えられていた時期があった。このような心情を敷衍して、いまだに国旗や国家を軍国主義と結びつけて考える人々がいる時代が終わっていないように、日本語と日本文化を世界に普及させることに慎重になっているのではないかと思われる。
現在多額の海外援助資金が「ハード」な分野に投資されているが、教育などの「ソフト」な面に対して需要のあるところに投資すれば国家・国民相互間の福祉にとってはるかに効果的・効率的なものになると考える。

世界の経済分野でのわが国の役割が非常に大きなものであり、したがって、日本語等を学びたいと希望している若者が大勢いるはずで、日本語教育等の需要は決して少なくないであろう。

日本語、日本文化を「押し付け」としてではなく、日本を理解してもらうための手段として諸外国に、過去の過ちに拘ることなく、普及していくことが今後大事なことだと考える。

Ⅱ　歴史の講義について

リソルジメント（イタリア国家統一運動）を中心にイタリア史が講義される。この中で、学生はVERDIのナブッコのコーラスEbrei "Va,pensiero,sull'ali dorate"をCDで聞かされ歌詞の原文と現代文訳が左右対照に併記されたプリントが配られた。ガリバルディ、マッツィーニ、カブールなどの人物評伝も語られた。ファシズムの時代の歴史も解説された。在のイタリアの若者たちに愛国心がないことをイタリア政府が嘆いていることなどを述べ、各国ではどのような事情にあるかについて学生に発表させ討論がおこなわれた。

また、別の時間にはビデオ映画 "Il Gattopardo"（日本では「山猫」というタイトルで、バート・ランカスター、クラウディア・カルディナーレ、アラン・ドロンの共演でこの時代のシチリア貴族社会の転変を描いたもの）が教授の解説付きで上映され、教室で全巻鑑賞する。重要な場面ではビデオの画面が止められプリントしたシナリオが配布され、教授が登場人物になりきって、感情を込めた口調で抑揚をつけて読み上げる。これによって、ビデオの曖昧な発音がはっきりと聞き分けられるようになる。学生も一人ずつ割り当てられた部分を口調を真似て読み上げる。このビデオテープを用いた講義は２日間にわたって行われた。

Ⅲ　その他、ビデオ映画を用いた講義

前述の"Il Gattopardo"のほか：

ⅰ．"I Cento Passi"を鑑賞し７０年代以降のマフィアの問題、イタリアの大衆運動、政治（Moro首相誘拐・赤い旅団など）についての講義があった。特にマフィアについては、現代イタリア社会のあらゆる分野の基底に潜在的に残滓を残しているということでmafiaという語の起源等から始めて、時間をかけて説明がなされた。

I Cento Passiの講義では、マフィアの残虐行為と警察の腐敗を取り上げるよりはこれに対抗して命を落とした若者とその後これらの不正を暴いた若者たちの行動を現実の歴史の中で解説するものであった。第２次大戦については深くは語られなかった。

ⅱ．L'ultimo bacio"を鑑賞し現代イタリア青年の社会生活、思想、行動などを討議し、イタリアと比較して自国の事情を説明する授業もあった。

Ⅳ　イタリア詩等

Giacomo Leopardi,Pier Paolo Pasolini等についての紹介があった。

イタリアは地方言語（方言を含む）を排斥しないということで地方語の説明もあった。

（写真：屋外授業の風景）

C. イタリア語演習(Esercitazioni)および発音演習(Esertazioni di Fonetic)
この２つの演習は、一人の教官（Silvia教授）が担当した。Aの「イタリア語」の授業の進行速度と歩調を合わせて演習が進められる。
Ⅰ. イタリア語演習
ⅰ. 演習の第一のカテゴリーは、"Qui Italia più Quaderno"などのプリントが配布されこれに学生が順番に速答して行くパターンの授業である。
ⅱ. 第二のカテゴリーは音楽のCDを聴いて歌詞を聞き分け情景を理解するものである。
ⅲ. 第三のカテゴリーはテープに録音された会話を聞いて内容を理解するものである。
上記ⅱとⅲはCD・テープを各々７～８回は繰り返して学生に聞かせる。
最初は、全体として何を言っているかを学生に答えさせる。
次に、もう一度聞かせて、聞き分けられたキーとなる単語をすべて拾い上げさせ、また、理解できない単語等について質問を受け、学生が納得して理解するまで根気よく分かり易い言葉で説明する。
さらに、すでに聞いた歌詞・会話等の空欄箇所のある文章を配布し、再度CD・テープを聴かせて穴埋めを試みさせる。
もう一度聞かせて各々自分の答えを再検討する。
最後に正解を示して再度音楽・会話等を聞かせる。
歌詞等の文法（現在、半過去、遠過去、未来の時制；接続法、条件法、命令法等の法）についても詳しく検討していく。
最初に聞いたときはほとんど理解できないものでも、何回も聞くと最後にはよく理解できるようになる。
この演習は、語学の基本(1)何度も繰り返し聞く、(2)声を出して発音する、(3)言葉の反射速度を早める、を実践訓練するものである。
ロンブ・カトー著「私の外国語学習法」（ちくま学芸文庫）によれば、外国語学習に費やされた時間というものは１週最低限１０～１２時間学習しない限り無駄であり、また、消費された時間×関心度＝学習成果であるとのことである。この大学の教授方法は十分にこの条件を満たしている。
ⅱ. のカンツォーネの例を以下に簡単に紹介する。
FRED BUSCAGLIONEの “ERI PICCOLA COSÌ”、 MANGOの “MEDITERRANEO”、 FABRIZIO DEANDRÈの “BOCCA DI ROSA” 等が教材になった。
“ERI PICCOLA COSÌ” は文法問題もあり教材のプリントは数ページになった。この時間には、学生全員に自国の居住している地域の状況・特徴をカンツォーネで歌われているそれと対比し発表させ、教官も含めて全員で討論を行った。
Silvia SERNIKOLA教授などは学生に多読を勧め、例えばAntonio Tabucchiがよいということであった。大学の前の書店の棚にもタブッキの本が沢山並べられてあった。
Ⅱ. 発音演習
これについては、呼称から想像されるような単語や文章の「発音」を学ぶものではない授業は各机の上にヘッド・フォーンとテープ・プレイヤーのある語学演習室で行われた。コピーされた会話の質問部分が読み上げられ、これに各自が考える時間を取らずに返答する。一区切り終われば自分の返答が録音されているテープを巻き戻してそれが文章として正しいかどうかを自分の録音した声を聞きながら確かめる。
この教官の授業ではもうひとつ特徴のある以下のような課題が全学生に出された。
それは、ペルージャの歴史的な遺跡や建造物等について、それが何処にあって何時、誰が、何故、どのようにして作ったか等を１ページぐらいの長さで文章にして提出する。課題の建造物等を次に例示すると、サン・ジョバンニ橋、エトルリア・アーチ、サン・セベロ礼拝堂、サン・ベルナルディノ祈祷所、エトルリア井戸等である。これは一種の野外研究である。教官が提出された学生の文章を訂正して印刷製本し、各自が自国に持ち帰る留学の記念とするものである。学生は、ペルージャ市の多くの遺跡などに関心を持つきっかけと

なり、町の文化を理解するために非常に有効な方法であると考えられた。
このような課外活動は向学心の強い学生を十分に満足させるもので、学校は労をいとわず学生の為を考えていることが理解され、大学の評判が上がり就学希望者が増えている理由が理解できた。

５．課外活動

①学校内の催し

月曜日の午前、金曜日の午後などには映画鑑賞、オペラ、音楽などが無料で催された。
イタリア映画のほか、”Sacco e Vanzetti”（イタリア語）のようなアメリカ映画７月には Jean Cocteau週間があって”Orphèe”（フランス語）のような彼の 作品が上映された。
音楽会も開催された。歌詞のプリント配布された。

②見学旅行

土曜、日曜には別添のような旅行が学校の企画で計画されていた。
添乗員付きのバス旅行で、現地ではガイドが付くかあるいは自由行動（エルバ島等は自由に海水浴ができる。）の旅行である。シエナの旅行では現地のガイドが「シエナの聖女カテリーナ」の話をした。（須賀敦子「シエナの坂道」にも画かれている。）
エルバ島旅行では、ポーランドとブラジルから来ている３週間留学の学生と話をした。全世界２３カ国から９３人、各々母国でイタリア語を教えていて、今回６２０ユーロの奨学金をもらってきた、日本からも若い教師が一人来ているとのことであった。これは、先に述べた研修・リフレッシュコースに属するものと思われる。

６．おわりに

イタリアは、第２次世界大戦ではドイツや日本と同様に外国（ギリシャ、アルバニア、エチオピア等）を侵略した歴史を持っているが、早期に敗北し、また終戦近くには自国のファシストやドイツと戦った歴史があるので、ナチスが支配したドイツとは異なった評価を受けており、またイタリア人自身もドイツと一線を画して自分たちを認識している。たとえば、ペルージャの中心街においても、あちこちの公園や市庁舎などに記念の碑銘があり、そこでは「何十人の労働者、農民が何年何月にここでドイツの軍隊に処刑された」等といった類の記述を読むことができる。
他方、イタリア自身が加害者の立場にいた時代があるので、第２時世界大戦の評価には微妙なものがあるようである。しかし、イタリア語とイタリア文化の普及活動は連綿として続けられており、特にペルージャの外国人大学はその面で世界各国の関係者から高い評価を受けている。

戦後急速に経済大国になったわが国は、国際社会において大きな役割を果たすことが期待されている。しかし、他国から信頼されながらその役割を果たすためには、金の力に頼りすぎないように用心しなければならない。

長期的な観点から、同じ過ちを犯さないためにも、自国の文化をより良く他国に知ってもらい広く人的交流を進めていくことが、金やものを援助する以上にいっそう重要になって行くのではないかと考える。

「受理年月日　2004年9月30日」